

作品名「ヒューマンツリー」

著者名 玄記

あらすじ：9歳の誕生日を迎えると、ドラキュラが血を吸いにやって来ると脅えている男の子。ある朝、目覚めたら木になってしまった初老の男性。処女懐胎に戸惑う女性と夢の中で会った男。聖なる夜の前夜、戸惑いと不安を抱えながらも日々を生きる、6人の男女の物語。

特記事項：特になし

本編の文字数：5000字

am5:30。朝起きてすぐ幸子は家を出た。向かいのアパートの角に置いてある吸い殻入れが幸子を待っている。まだ空は藍色でヘッドフォンから流れてくるエド・シーランの声が切ない。通り過ぎていく車を横目にタバコの煙を吸い込む。ああ、死にたい。吸い殻をアルミの穴に押し込み、脇に置いてあるペットボトルで吸い殻入れに水を足す。もくもくとあがる煙でこの場所が無くなるのはごめん。けれど幸子はもつと水をやらなければいけない。その足で駅へと続く道を歩き、学校のフェンス沿いにある花壇の前に立った。ひとつため息をつき、ジョウロに汲んだ水をどぼどぼと1本の木にそそぐ。その木は幸子の夫だった。3ヶ月前に突然、木になってしまった。寝ている所に水をかけられ、夫は驚いて目を開ける。

「ああ、さっちゃん！おはよう、今日もかわいいね」

地面に埋まった体は木そのもので、顔だけが幹の真ん中から浮き出ている。人間だった頃はまだこれほど不気味な様相ではなかったし、これほど軽口を叩く人物でもなかった。

「ねえ、どうしてあなたまだ生きてるの？除草剤、撒いてもいい？」

「おお、さっちゃん！君が望むなら僕はなんだって受け入れるよ！燃えて灰になっても構わない」

「私は何一つ受け入れられないのよ！」

そう言うってからジョウロを夫に投げつけ、地面にこぼれた水を眺める。

「なんで…なんであんた、木になってんのよ…」

敏夫は布団から目覚めると、うまく立ち上がれないことに気がついた。最初、ついに自分もどこかの血管が詰まってしまったかと思っただが違った。足の先から木の根が伸びていて、地面と繋がってしまった。敏夫は今まで何事も自分の力で対処してきた。今回の場合も敏夫は、枕元にあったタバコのライターで木の根を焼き切って布団から立ち上がった。鈍い痛みを感じたが、何事も無い様に身支度を整えると自宅を出て学校へ向かった。敏夫は小学校の副校長だったが、昼休みに栄養失調状態になって校庭をさまよった。そして行き着いた先は花壇だった。土の中に足を埋めるとこれ以上ない安心感を感じた。着ていた背広も段々と木の皮に覆われ、3ヶ月後にはすっかり木と一体化した人間になってしまった。周囲は騒然とし、自分の変化に戸惑ったが良いこともあった。学校の子どもたちが木になった敏夫を

珍しがり、毎日声をかけて優しくしてくれるようになった。

「副校長先生、おはようございます！今日もお水あげておきますね！」

「うん、おはよう。いつもありがとう。今日もみんなと仲良くね」

「はい！先生！ところで、先生はなんの木なの？」

「うん、ヒューマンツリーかな、言ってみれば」

ほとんどすべての子がヒューマンツリーに一度は声をかけに来ていた。だがその中で一人だけ真っ青な顔をして朝も帰りも俯いて歩き、ヒューマンツリーに近づいてこない男の子がいた。ビー玉みたいな瞳をした楓という名前の美しい男の子だった。楓は8歳の小学3年生で、ドラキュラに取り憑かれていた。半年前からずっと、9歳の誕生日にドラキュラがやって来て、自分と家族は血を吸われて死んでしまうか人間でなくなってしまうと脅えている。そして今日が8歳の最後の日。明日が誕生日だった。

「僕はきつとあの副校長先生みたいに、人間じゃなくなってしまうんだ。ママもきつと緑色の顔をしたドラキュラに殺されちゃう。9歳になんかなりたくない。9歳になんかなりたくない」

そう小さな声で呪文の様に繰り返しながら家へ着いた。ランドセルを下ろすと肩の疲れから解放される。

「ママ、ただいま……」

楓が玄関を開けて中へ入っても返事がない。もしかしてドラキュラが僕の誕生日を間違えて先にやって来て、ママの血を吸ってしまったんじゃないか。楓の心臓は大きく脈打った。

「ママ！大丈夫！？」

楓の母親は、ダイニングルームの机に突っ伏していた。赤い液体が机に広がっていたから楓はドキッとしたが、よく見ると赤ワインだった。

「ママ、楓だよ？もう怖くないよ？」

ママは一体何から逃げたいんだろう？

楓は母親の身体に抱きついた。あたたかくて、ゆっくりと胸が膨らみ、また萎んでいく。

僕はドラキュラが怖いように、ママもきつと何かを恐れているんだ。

「大丈夫。ママ、楓が守ってあげるからね」

顔にかかった髪の毛をそつとどかすと、ママの目から涙が一筋流れていた。楓はそつと涙をプラスチックの下敷きの切れ端に載せ、瓶に回収した。楓はママの涙をもう半年間も溜め続けている。小瓶の3分の1程に溜まったそれは、楓にとつての聖水だった。テーブルを拭き、空き瓶を片付け、ワインの中身を流しに捨ててからテーブルに戻り、組んだ腕の上にあるごを乗せママの顔を眺めた。

「十字架、にんにく、聖水……だめだ……これじゃ誰も守れない」

楓はママの隣で日記にこう綴った。

「ママは毎日涙を流します。僕はそれをもらって、瓶に集めています。一度舐めてみたら、海

の味がしました。ママの中には海が流れているのです。明日は僕の誕生日です。世界で一番最悪の日です。ドラキュラがやって来て、僕とママの血を全部吸ってしまうから。それをいつかパパが見つけるでしょう。カラカラになった僕とママを。けどそうならないように、僕がどうにかしなくちゃ」

機会がないわけではなかった。素敵だな、と思う男性がいないわけでもなかった。自分の容姿だけで言えば中の上と言えるはず。実際、何度か告白をされた事もある。ただ、エリはまだ男性を受け入れたことがない。それがエリの体の事実だった。

駅前の喫茶店に入りコーヒーを注文する。それから考え直し、エリはやはりルイボステイーに変更した。昨日見た夢を頭の中で反芻する。いや昨日だけではない。この半年間、毎日のように同じ夢を見る。抱かれている夢だ。私の体を隅から隅まで舐めまわし、私の中に入ってくる。夢の中で痛みと快感を感じ、目を覚ますと私の体は熱り、湿っている。エリはその事実には恥ずかしさを感じ、運ばれて来たルイボステイーを口にして気持ちを落ち着かせる。それから、お腹をさする。お腹をさする？それが問題だった。

「私は妊娠している？」

鏡の前に立つと、エリは自分でも不思議なほど体型が変化していくのを感じていた。服の上から見下ろすと、不自然にお腹の部分がぼっこりと出て来ている。おかしい。そんなはずはない。私はまだ誰とも繋がった事はない。じんわりと出て来た汗に気がつき、ふと窓の外を見上げる。

「あ……あ、あの人だ」

そう思った途端、エリは千円札をレジに置いて急いで外に出た。何かに突き動かされるように走り、後ろから手を掴み、振り向いた男性にこう伝えた。

「あなたの子を孕っているの」

固まっている男の顔は間違いなく、毎日夢で私を抱いたあの人だった。

佑介はこれはドッキリか何かの悪い冗談だと思った。けれど女性の表情に偽りは無く、握られた手の力が真剣味を伝えて来た。

「え……えっと……失礼ですが、お会いした事もないです、よね」

「どうしてよ……会った事もないのに、どうしてこんなお腹になるのよ」

エリはそういってその場に泣き崩れた。佑介は周囲を通り過ぎる人達の白い目を感じ背中を冷たい汗が流れた。

「え……ちよ、ちよっと、困ります……ば、場所を変えましょう。落ち着いて話を……」

結局2人は先程までエリがいた喫茶店の奥の席に向かい合って座った。佑介は頭の中がぐるぐると回転して混乱した。結婚して12年。浮気したこともなければ精子バンクに登録したこともない。突然初めて会った人にあなたの子どもが出来たと言われ、間違いなく美人局の類だと思った。だがまずいのはこの状況だ。人目を避けたくて店に入ったはいいが、誰

か仲間を呼ばれてしまうのではないか。妻のケイに連絡をするか？いや、だめだ。どうせ朝から酒を飲んでいるだろうし、こんな状況をうまく説明できるはずもない。佑介は運ばれて来たコーヒーとルイボステイーを見てふと我に返る。明日は、楓の誕生日だ。もう9歳になるのか。会いたい。外を見るともう陽が落ちていた。楓、会いたいよ。

pm11:30。どうやつても着地点が見出せずに、佑介とエリは店を追い出された。仕方なく家までの道を彷徨い歩く。

学校の前を通ると、女性が一人で剪定をしているようだった。だがこんな時間に照明もなく一人で作業しているのはおかしい。それもかなり太い木をノコギリでぎこぎここと切ろうとしている。するとその木が唐突に喋り始めた。

「木下さん、楓君のお父さんではないですか？副校長の佐々木です」

突然、木から喋りかけられ佑介は驚いたが、久しぶりに普通の会話ができる気がした。これが噂に聞くヒューマンツリーか……

そこで幸子がノコギリの手を止め、ああ、疲れた、と呟いた。裕介は背負っていたリュックを下ろし「僕、代わります」と幸子の手からノコギリをもらう。血が出ないかと心配になったが、ヒューマンツリーになった敏夫はしばらくしてどしーん、と横倒しに倒れた。額の汗を拭い佑介が訊ねる。

「これ、どうでしょう」

「本当はね、燃やしちゃうかと思ったの。でも……」

楓は時計の針を見て、十字架と聖水を手に部屋の隅で震えていた。日付が変わる。僕は9歳になってしまった。死ぬんだ、と思った瞬間涙がぼろぼろこぼれて来て、思わずママに飛びついた。

「ママ！ママ！僕死にたくないよ！ドラキュラが僕とママの血を吸いに来ちゃうんだ！」と大声で泣いた。しがみついたママの体からは良い香りがして、楓は余計に悲しくなった。その時、がちりと玄関の扉が開いた。楓の心臓が凍りつく。ママはワインの瓶を逆さに持って構えた。足音が近づいて来て、ダイニングのドアが開いた。

「楓、誕生日おめでとう。ケイ、ただいま」

ケイは危うく持っていた瓶を佑介に振り下ろす所だったが、その代わりに佑介を抱きしめていた。ケイは泣いていた。それからそっと佑介はワインの瓶を楓に渡した。

「こんな時間だけど、今日は友達を連れて来たんだ」

佑介はそう言って玄関の外まで2人を連れてくると、2人の女性とヒューマンツリーを紹介した。

「ほら、ケイ。前に言っていたら？庭に木を植えたいって。これなんかどうかな？喋り相手にもなってくれるし……」

ケイは台車に横になっているヒューマンツリーを覗き込んだ。

「あなた、お酒は飲める？」

「ええ、除草剤以外なら」

「あはは、冗談も言えるのね。ところで、どうしてそんな姿に？」

「わからないんです。ただ思い当たるのは、昔、生まれ変わるなら木になりたいと思っただけです。けどこんな形になるとは思いませんでした」

「そう…ツリーには？」

「えっ？」

「クリスマスツリーになるのはどう？」

その時、幸子が返事をした。

「お願いします。この人、今が一番幸せそうだから。ちようどいいかもしれない」

「奥様、飾り付けを手伝ってくださいましね？」

「ふふっ、タバコを吸いながらでもいい？」

「もちろん。ところで、あなたは？」

ケイはお腹をさすっていたエリを見つめた。若く美しい、私にもあんな頃があったのかと不思議に思う。

「私は、あなたの旦那さんの子どもを孕ったんです。一度も会った事もないのに。夢の中で、抱かれたんです」

「……そう。じゃあお酒はダメね。ホットルイボスで乾杯しましょう。詳しく聞かせてちょうだい。さあ、皆さん中へどうぞ。クリスマスツリーを庭へ。今日は楓の誕生日なんです、ぜひ一緒にお祝いしてくださいな」

ヒューマンツリーを運ぼうとエリが木に手を添えると、楓がその手をそつとどかした。

「お姉ちゃん、僕が代わるよ。だって、僕の弟妹がお腹にいるんでしょう？」

「そう、あなたは一人じゃないんだから。それにうちの旦那のケツ位拭いてやんなきゃね」

幸子もそう言っただけをそつと押しつけた。エリは初めて家族を持ちたいと思った。佑介は腕まくりをして木を抱える。

「言っておくけど、パパは何もしてないぞ？本当に何もしてないんだ。よし、いくぞ！せーの、それ！」

街灯の後ろに一つの影。どこよりも賑やかになった家にいる木下楓の姿をドラキュラが見ていた。

「やれやれ。聖なる夜に幸あれ、か」

そう呟くと、マントを翻し真夜中の道に消えていった。